二〇二〇年一月二四日

川音の軽やか春も遠からず　こすもす
参磴の一歩一歩に淑気満つ　更紗
蝋梅の香に包まれて庭掃除　せいじ

二〇二〇年一月二三日

半日を寄席に笑ろふて骨正月　菜々
逆光の川面の影は大白鳥　素秀
冬木の芽優しく包む今朝の雨　明日香
枯山に空のリフトのすれ違ひ　素秀

二〇二〇年一月二二日

寒空に島の灯潤む夜の沖　智恵子
終活の整理に暮れて冬籠　三刀
道行きや蝋梅の香に歩を止めて　やよい
榾火に手かざして彼を悼みけり　素秀
傘連ね師の墓を訪ふ寒の雨　なつき

二〇二〇年一月二一日

一湾に真珠筏や初明かり　もとこ
慈悲塔の籬のごとく石蕗黄なり　満天
持ち寄りのお菓子に和む初句会　菜々
地蔵堂香煙絶えぬ小春かな　こすもす
釣り人の岩に張り付く冬の海　智恵子

二〇二〇年一月二〇日

大寒の真っ赤な落暉ビルに映ゆ　やよい
白壁の眩しき朝や春近し　明日香
息災を確かめ合ひし新年会　せいじ
売地札傾ぎしままに霜の原　そうけい
藁苞に覗く緋色や寒牡丹　宏虎
堂屋根にふくら雀の一と並び　菜々
洞窟に千の仏や福詣で　なつき

二〇二〇年一月一九日

寺通り洩れ聞こえくる寒念仏　愛正
おでん煮る一人にかなふ種の数　はく子
天空に火屑の泳ぐ大どんど　ぽんこ
悴みし手に接待のお茶賜ふ　たか子

二〇二〇年一月一八日

一人旅列車の窓の結露拭く　智恵子
初雪の乱舞を見よや滑走路　智恵子

毎日句会みのる選・二〇二〇年一月二六日